



丑

rocksan

ある日、玄関のドアを開けると牛がいた。
色は全身こげ茶色一色で、角はしっかり生えている。
わかりやすく言えば、
牛乳を出すホルスタインではなく食用の和牛だ。
それが我が家のドアの前に横たわっている。
何故？いつから？
意味の分からない状況に混乱は増すばかりだ。
驚いている私を横目に、
牛は何食わぬ顔をして寝転がりそっぽを向いている。
まるで私の存在に気づいていないようだ。
ドアを閉めてみる。深呼吸をして再びドアを開けた。
やはり牛がいた。

私の部屋は6階建てマンションの6階一番奥の角部屋だ。
階段やエレベータまでは一本の廊下で、
その途中に3部屋並んでいる。
私の部屋だけがその廊下の突き当たりであり、
後の部屋は横並びという構造だ。
私の部屋はL字型に並ぶ部屋の
下の棒の部分にあるといえばわかりやすいだろうか。

牛は私の部屋と左向かいの部屋の間に陣取っている。
つまり牛を乗り越えないと私はこのマンションから出られないのだ。
私はドアをあけ切った状態で牛に近づいてみた。
牛は丁度ドアを開けきっても当たらない場所にいて、
生き良いよく開けてもドアで牛を叩く心配はない状態である。
ドアノブに左手をかけた状態で牛を見た。幻ではないようだ。
呼吸音も聞こえるし、腹の辺りがかすかに動いている。
私は恐る恐る開いている右手で牛に触れようとした。
するとさっきまでそっぽを向いていた牛の顔が私の方を向いた。
牛と目が合う。きらきらと輝いている。水分を含む目だ。
慌てて私は再びドアを閉めて部屋に戻ってしまった。
置物でもなく、確かに生きた牛のようだ。

ドアスコープで覗いて見ると、
牛はまたそっぽ向いて横になっている。
そもそも何故ここに牛がいるのだ。
ここは6階だ。エレベータに乗って牛が上がってきたというのか。
そもそこの都市部のど真ん中に何故牛がいるのだ。
どう考えても不自然で意味が分からない。
左手の腕時計に目をやると、
最初に牛を見つけてから30分は経っている。
いつも余裕を見て出勤しているとはいえ、
そろそろ急がなくては会社に遅刻してしまう。
しかし出社するには、
あの意味の分からないものを乗り越えなければならない。
もう一度ドアスコープを覗くと、隣の部屋のドアが開くのが見えた。

隣人は若い女性だ。その程度の認識しかない。名前も知らない。
すれ違っても挨拶する程度の隣人だ。
しかしどんな人であれドアを開けた先に牛がいたら驚くに違いない。
若い女性なら特にだ。
私は隣人がどんな反応を見せるのか気になってそのまま覗き続けた。
ドアを閉じる時、見覚えるのある隣人の姿が見えた。
確実に彼女の目に牛が映ったはずだ。
しかし彼女は特に気を止めることなく、ドアを閉めて鍵をかけた。
そしてそのままエレベータの方へと歩き出した。
あまりにも予想外の反応に私が驚いてしまった。
慌ててドアを開けて彼女に声をかけた。
「す、すみません！」
大きな声に驚いたのか彼女の背筋が一瞬びくった。
そしてゆっくりと私の方に振り返った。
「何ですか？」
少し怯えた様子だ。牛を見た時に私が彼女に期待した反応だ。
「いえ、えっ...とあの見えますか？」
主語が無い。しかし状況から察する事が出来るだろう。
「何の事ですか？」
意味が分からないようだ。キョトンとしている。
「牛ですよ牛！？何故驚かないのですか？」
「見えてないのですか？」
彼女はようやく理解したように、
「あー牛の事ですか。なるほどなるほど。」

と軽く答えて見せた。

「どうしてそんな普通にいられるのですか？」

「だって牛じゃないとおかしいじゃないですか。」

「はっ？」

思わず間抜けな声を出してしまった。

「あっすいません。急ぐのでこれで。」

彼女はエレベータの方に向き直しそのまま足早に歩き出した。

このやり取りの間も牛は変わらずに横たわっていた。

再び時計に目をやるとさらに時間は過ぎており、
どう足掻いても遅刻は確定してしまった。
仕方なく会社に電話をしてみたが、なんと言いつてもしょうか。

「家の前に牛がいて…」と言って誰が信じるものか。
嘘ならもう少し上手いものがあるだろうに。
あれこれと考えているうちに、電話は繋がった。

そしてそのまま電話は私の上司へと繋いでもらった。
「どうした？お前がまだ来てないなんて珍しいじゃないか」
「すいません。ちょっと色々ありまして今日は遅れそうです。」
「何があった？」

低い声で追求された。確実に機嫌が悪くなっている。
当然だ。私の上司はそういう基本的な事にはとても厳しい人だから。
「牛が…」

思わず口から漏れた。
「牛が？」
「牛が家の前にいてそれに驚いているうちに遅くなってしまいました！」
言ってしまった。
「そうか…」

終わった。
「それなら仕方ないな。」
先ほどの不機嫌な調子とは打って変わって、
非常に穏やかな口調になっている。
「それじゃ今日は休みという事にしておくぞ。」
恐る恐る尋ねてみた。
「それはもう明日から来なくていいということですか？」

そういうと上司は急に笑い出した。
「何をバカな事を言っている。
牛がいるのなら仕方ないじゃないか。
今日お前が回る予定だった先には、
そのように伝えておくから心配するな。
それよりも明日からどうする？もし暫く牛がいるようなら、
在宅で仕事ができるように手配するが。」

どういう事なんだ。
「私の話を信じてくれるのですか？」
「嘘なのか？」
「嘘ではないです！」

「なら問題は無い。また明日電話してくれ。
もし牛がいなくなったらそれから会社してくれたいいな。」

「わ、わかりました。」

そのまま電話が切れた。

立ち尽くしたまま改めて目の前にいる牛を見てみた。

どうみても普通の牛である。

他の牛を直に見た事があるわけではないが、

テレビや写真などで見たそのままの牛だ。

その牛が突然家の前に現れた。

異常である。

しかし私以外の人間は皆この状況を受け入れている。

異常なのは私の方なのかとさえ思えてきた。

今日は予想外の連続で疲れた。

私はそのまま部屋に戻りベッドに倒れこんだ。

次の日、やはり牛はそこにいたので上司にそう連絡した。
するとその日のうちに手配してくれたのか、
在宅で仕事するために必要なものが送られてきた。
配達してくれた人も牛に驚く様子は無かった。
荷物の受け渡しは牛の上を通す形で行われた事だけが、
普通とは少し違うだけでそれ以外は何も無かった。
お陰で仕事は部屋の中でも出来るようになり、
それ以降基本的には部屋の外に出る必要が無くなった。
生活に必要なものは電話やネットなどで手配した。
尋ねてくる友人もいたが、
皆牛越しで会話をして直ぐ帰ってしまった。
玉に牛が向きを変えて人一人通れる幅がある時だけ、
部屋に人を招いたりもしたが皆幅があるうちに帰ってしまう。
これは辛かった。
どうやら牛を跨いではいけないらしい。
私自身何度か牛を跨いで外に出ようとしたが、
その度に突然牛は立ち上がり私の邪魔をした。
無理矢理乗り越えようと思った事もあったが、
その巨体の迫力に怯んでしまい、
実行に移した事はない。
そんな日々が続き、少しずつではあったが
この日常になれていった。
特に変わった事と言えば、
隣の女性と仲良くなった事ぐらいだ。
彼女は部屋から出られない私を気にかけてくれたらしく、
呼び鈴を押すための棒まで用意して、
私に声をかけてくれた。
最初のうちは牛越しに話すだけだったが、
やがて手料理を分けてくれるようになり、
通れる時は部屋に訪ねてくれるようになった。
そんなささやかな幸せな変化を味わいながら、
日々は流れて春から夏へ夏から秋へそして冬になった。

時が流れるにつれ牛は少しずつ痩せていった。
何も食べてないのか流石に心配になり、
適当に野菜を与えようとしたが、
決して口にはしようとしなかった。
それまでは正直邪魔者であった牛だが、

毎日顔を合わせる唯一の相手であり
多少なりとも親愛の情が沸いてきたようだ。
年の明ける前日、牛は痩せすぎて
あばら骨が浮いている状態になった。
思わず私は、「大丈夫か？」と声をかけてしまったが、
当然返事は無い。
どんな食べ物を与えてもやはり食べようとしない。
どの獣医に電話しても仕方ないと言われて切られてしまう。
私はその日牛の傍を離れる事が出来なくなってしまった。
やがて夜になりもう直ぐ年が明ける頃になると、
牛の疲労はますます酷くなり呼吸も弱くなっていた。
それまで触れるの躊躇っていた私だったが、
あばら骨の浮いた腹に触れて、
何度も大丈夫かと声をかけた。
その時初めて牛の体温を感じた。
この寒い夜の中で今にも消えてしまいそうな温もりを。
何故だが涙がこぼれ出した。
いつの間にか私にとってこいつは、
大切なものになっていたようだ。
牛はそんな私を見て顔を近づけてきた。
初めて見た時のような輝きはもうないけど、
変わらないつぶらな瞳で私を見ている。
もう怖くは無かった。
牛はさらに顔を近づけ私の流れる涙を舐めた。
そして突然立ち上がり私とは反対の方へと歩き出した。
追いかけてしようとしたが足が動かない。
ずっと屈んでいたせいだろうか。
牛はゆっくりと歩を進め、階段手前で足を止めてた。
牛は振り返り私を見て消えそうな声で小さく鳴いた。
そしてまた歩き出し少しずつ消えていった。
そのまま直ぐに完全に消えてしまった。
私は動けないままそれを見守る事しかできなかった。
そして年は明けた。

牛が消えた後、ようやく自由に外へ出かけれるようになった。
しかしとても初詣などに行く気にはなれず、
そのままベットで眠ってしまった。

そして初日の出が昇ってから随分とたった後、
私は目覚め部屋のドアを開けた。
そこには虎がいた。
牛のいたその場所に虎がいた。
来年は兎がいるかもしれない。